

新年のご挨拶

「わからない、治療法ない、諦めない」時代から治る時代へ

一般社団法人 日本臨床化学会 代表理事
安東由喜雄

日本臨床化学会の代表理事を拝命し数か月が経過し2年度目となる新年がやって参りました。会員の皆様、本年もどうかよろしくご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

考えてみますと、二十一世紀が始まった頃から、様々な難病の画期的な治療法の開発が一段と活発化してきているように思います。この流れは、さらに加速し、早期診断ができれば治療へと導くことのできる疾患は一段と増えていくように思われます。某大学の神経内科は今も第三内科の中にありますが、かつて「神経内科の疾患は、わからない、治療法ない、諦めない、だから三内科」と揶揄された時代がありました。しかし今は隔世の感があり、そういう流言飛語をする学生はいなくなったと聞いております。我々が研究している家族性アミロイドポリニューロパチー（FAP）も、1990年代に肝移植が登場する前は全く治療法のない疾患でした。従ってこの病気の診断に関する発表の折には、「治療法のない患者の診断をして、何の意味があるのか」と質問を受けたものですが、そんな無神経な質問に、「時代錯誤もはなはだしい」と胸を張り、「早期診断が極めて重要」と話すことができるようになってきました。

昨年、品川で学会が予定より早く終わり、時間がかなりできたので、ポンペ病の治療薬開発にまつわる実話を扱った映画、「小さな声が呼ぶとき」を見ました。人工呼吸器をつけポンペ病に苦しむわが娘の「お父さん、もっと生きたい」という無言の訴えを澄んだ瞳を通して感じ取った父親が、敢然と立ちあがり、何年かの紆余曲折の末、ゼンザイムというベンチャー企業の助けを借りて酵素補充療法にこぎつけるまでを描いた物語でした。最近、国はがんや生活習慣病など患者数の多い疾患により多くの研究費を付ける傾向にあり、小さな声が届きにくい状況がありますが、こうした希少疾患研究も、患者・家族の病気の克服に向けた熱意が途絶えず、優れた研究者、オーガナイザーと手を組む道を切り開くことができれば、いつか小さな声が中くらいの声、さらには大きな声となってゴールにたどり着くことが出来ることを実感し、勇気付けられました。

私どもの日本臨床化学会もこうした医学の進歩の中で診断・病態解析に関わるエキスパートの集団として大いに貢献していかなければなりません。そのためには、学会自体が時代に即応したものに姿を遂げていく必要があるため、昨年、会員増委員会として産声を上げた委員会を「あり方検討委員会」として常置委員会に加え、委員の先生方から様々な提言をしていただくようお願いしているところです。一般会員の先生方も、益々価値観が多様化し、医学、医療が複雑化する中で、思いついたこと、不満を感じたことを率直に言葉にいただき、本会の発展のためにお力を賜りたいと希っております。末筆となりましたが、会員の先生方の益々のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。

2012年 元旦